

アラスカ・サケ減少問題における知識生産の民族誌
——研究者はいかに野生生物管理に関わるべきか——

近藤 祉秋

要 旨

アメリカ合衆国アラスカ州では、2010年前後から商業漁業および生存漁業において重要な位置を占めるサケ類（とくにマスノスケ）の不漁が続いており、大きな社会問題となっている。本稿では、クスクイム川上流域における内陸アラスカ先住民と州政府の協働にもとづく資源管理の取り組みを報告し、近年の北アメリカ北部地域における「伝統的な生態学的知識」をめぐる議論に文化人類学的な観点から貢献することを目指す。本稿においては、とりわけ、築調査の観察とビーバーダムに関する見解を事例として、(1) 築調査において、遡上時期に関する TEK が科学知を生み出すのを補佐することによって、これまで潜在的に対立関係にあった利害関係者間で情報の共有がなされたこと、(2) ビーバーダムがサケの遡上を阻害しているとする現地人に対して、科学者は近年の関連研究の成果をもとにして、現地の見解が正しいか否かさえ検討することがない状況を報告する。現在アラスカを揺るがすサケ減少問題は、人類学者が民族誌的知識生産を通して、先住民と非先住民を含めた社会といかに関わっていくべきであるかという問いを突きつけている。

キーワード

サケ、アラスカ先住民、科学実践の民族誌、狩猟、ネイチャーライティング

1. はじめに

アメリカ合衆国アラスカ州では、2010年前後から商業漁業および生存漁業において重要な位置を占めるサケ類（とくにマスノスケ）の不漁が続いており、大きな社会問題となっている¹。村落部に暮らすアラスカ先住民にとって、都市部から運ばれてくる加工食品や冷凍食品は都市部の2、3倍と高価な上に、寒冷な気候のため、新鮮な野菜や果物を手に入れることが難しい。そのため、アラスカ州の面積の大部分を占める村落部においては、野生動物の狩猟や河川・海洋における漁撈をおこない、みずからの食料を調達することが欠かせない。サケは、ヘラジカ、カリブー、クロクマ、ビーバー、ホワイトフィッシュなどと並んで、本稿で取り上げる内陸アラスカ先住民社会において重要な食料源と見なされてきた。さらに、サケは日常的な分配や儀礼・祭宴での食事に利用されることで先住民アイデ

¹ タナナ・チーフ会議のような内陸アラスカ先住民の利益を代表する機関のニュースレターでも、2014年から2015年にかけてサケ減少問題について多数の言及がなされている。

ンティティの再生産にも深く関わっていることが指摘されている(井上 2015)。その意味でサケはアラスカやその周辺にある環北太平洋地域において生態学的にも、民族誌学的にも「キーストーン種」なのだ(Colombi and Brooks 2012)。サケの不漁は、アラスカ先住民諸社会の物理的および文化的な生存の基盤を損なう可能性がある問題として注目を浴びており、先住民側は野生生物管理関係の当局と協働して、事態打開に努める一方で、その決定・取締りに抗議をおこなう場合も散見される。

本稿では、クスコクィム川上流域における内陸アラスカ先住民と州政府の協働にもとづく資源管理の取り組みを報告し、近年の北アメリカ北部地域における「伝統的な生態学的知識」(Traditional Ecological Knowledge、以下 TEK と表記する)をめぐる議論²に文化人類学的な観点から貢献することを目指す。その際、行政側を代表する自然「科学者」と先住民社会の交渉という関連先行研究で追究された論点に再び着目するのみならず、社会／人文「科学者」としての人類学者がどのようにその交渉過程に組み込まれているのか(もしくは組み込まれていないのか)という疑問にも触れることとする。

TEK 研究は、1970 年代後半以降、認識人類学が有していた民俗分類体系に対する関心、エミックな領域への積極的な評価を受け継ぎながら、民俗知と科学知の認識論的な対等性を主張してきた。さらには、先住民が周りの自然環境との間に築いてきた関係が独自のルートメタファーにもとづくものであることを指摘した点で、先住民の土地権や生業権をめぐる政治的交渉にも理論的正当性を与えるものであった(大村 2002: 34-55)。現在、関連領域において、TEK 以外にも「在来知」(indigenous knowledge)などの術語が使われているが、本稿ではこれらの間にある差異をあつかうことはせずに、大村敬一による以下の TEK の定義に従って、議論をすすめていく。

伝統的な生態学的知識とは、欧米の近代科学の基準における『自然』環境についてだけでなく、『社会』や『超自然』をも含むかたちで先住民に把握されている環境全体に対して、過去何世紀にわたるその環境との相互作用を通して諸先住民族がそれぞれに鍛え上げてきたさまざまな知識と信念と実践の総合的体系の総称であり、欧米の近代科学とは異なっているが、知的所産としては近代科学と対等な世界理解のパラダイムとその具体的な内容のことを意味しているのである。(大村 2002: 33-34)

現在、TEK は様々な場面で論じられており、文化人類学者、民俗学者、社会学者のみならず、1992 年の国連環境開発会議におけるリオ宣言以降、自然科学者、野生生物管理関係の政府機関勤務者、先住民権活動家、先住民組織、環境活動家も盛んに議論に加わっている。TEK への関心の高さを反映して、北アメリカ北部地域においては、先住民組織と行政が協働的に資源管理をおこなう共同管理(co-management)が制度的に確立されていったこともあり、TEK やその関連用語は行政用語としての側面ももつ(Thornton 2001; Nadasdy 2003; 久保田 2009)。

² TEK 研究には事例研究を含めれば膨大な研究蓄積があり、その詳細なレビューをおこなうことは本稿の目的ではない。カナダ東部のイヌイト社会に力点を置いているが、古典的な TEK 研究のレビューとしては大村(2002)を参照のこと。

もちろん、その論調には振れ幅があることも重要だ。一部の環境活動家が用いる場合には、環境破壊を引き起こした近代文明にかわるオルタナティブの思想として無批判に賞賛されるくらいがある（スズキ 2010）が、文化人類学者や一部の民俗学者は、この概念がもつ弱点も考慮した上で、本当の意味で脱—植民地主義的な研究実践や行政施策を考える必要性を主張している（cf. 菅 2013: 237-238）。例えば、大村（2002: 55-58）は、従来の TEK 研究が TEK を古老や熟練猟師がもつ不変の知識体系として本質主義的に描くことで、現在における TEK の変化を正統的な知識からの逸脱としてしか見なせなくなったと論じた。

大村とは少し違う角度からの検討としては、ポール・ナダスディ（Nadasdy 2003）が、カナダ・ユーコン準州南部におけるドールシープの共同管理をめざす取り組みの経緯を詳細に報告し、究極的には「TEK と科学知の統合」が行政によるリップサービスに終わり、逆に先住民側のさらなる不信を招いてしまったと主張した³。ナダスディによれば、現状の取り組みにおいて、「知識統合」は、数量化を重視する科学知の生産様式にあわせて、先住民の人々がもつ知識や経験を「区画化」し、そこからはみだす部分を捨象する「蒸留」をともなっている。

関連する研究をしているジュリー・クルックシャンクによれば、ユーコン準州において、先住民の古老が集まる会合が開かれた際にある非—先住民の魚類学者がキャッチ&リリース関連の最新規則に関する発表をおこなった。カナダの先住民社会において、キャッチ&リリースは魚の命をもてあそぶ非礼な行為とされているので、ある古老は、発表の後に立ち上がり、魚への非礼が原因で魚の世界に誘拐されてしまった少年にまつわる神話を語り、キャッチ&リリースの非礼さについて意見を述べた（Cruikshank 1998: 57）。

だが、魚類学者にとっては、この神話の語りはあくまで「超自然」の領域（e.g. 「カナダ先住民は魚が人を誘拐したり、人の言葉を話したりすることができると信じている」）に属するものであって、「自然」の領域に関する議論（e.g. 「キャッチ&リリースは資源管理をする上で有効な方策であるのか？」）をする上では関連性のないものとして不可解に受け止められたであろう。ナダスディ（Nadasdy 2003: 131, 213）によれば、共同管理や TEK 関連の会合において先住民の古老が発言したあとには科学者たちはどのように応答したらよいかかわからないので黙ってしまい、いずれ誰かが古老の発言の前にしていた話を再開するといった光景がよく見られた。しまいには、非—先住民の考え方に明るい者が古老や猟師に対して、科学者の前で発言する際には神話や禁忌の話をせずに、どこでいつ、何を何頭みたのかだけを述べるようにと会合の前に助言することまであったという（Nadasdy 2003: 183）。どのような範疇に属する発話が関連性のあるものなのかという公準を科学者が握っているかぎり、本当の意味で先住民の世界観が「真面目に受け取られる」ことはないとなダスディ（2012: 347）は主張する。

近年のアラスカ州におけるサケ減少問題に関して、井上敏昭（2015）がナダスディらの問題意識と共通する議論を提起している。米国アラスカ州北部とカナダ北西部に居住するグイッチンの人々は、長年、ユーコン川中・上流域においてサケ漁撈をおこなってきた。彼らは、白人社会との接触の結果、数量的な把握にもとづく科学者の実践を「科学的説明」

³ 私は、別の論文でナダスディの議論を検討した（近藤 2016）。

として一定の理解を示している。他方で、彼らはみずからの漁撈実践がサケ遡上数の統計的把握や資源管理区域の線引きなど、現在の科学的漁業資源管理を支配する考え方と異なるパラダイムにもとづいているという意味を込めて、「伝統的説明」もしくは「diinjii zhuuの生き方」(グイッチンの生き方)と呼んでいる。しかし、先住民の権利に敏感であることが当然となった近年でさえ、「diinjii zhuuの生き方」は資源管理の意思決定に用いられる力をもたず、「先住民の主張は断片に切り取られ、『先住民の権利に配慮した』という行政手続きを満たすために貼り付けられるに過ぎない」(井上 2015: 193)。

先住民が行政による資源管理調査に参加する際にも、政治的なコンフリクトが生じる。ソナーによる計測と観測塔調査員の報告によって、2005年にマスノスケ遡上量がかなり減少したというデータが提示されたとき、アラスカ州政府は機械の故障を理由にして、このデータを無視し、商業漁業の解禁を決定した。グイッチンの側は州政府が税金をもたらす商業漁業者の肩をもったと憤慨し、州政府の側はグイッチンの調査員がサケ遡上数を過小報告したと疑っていた(井上 2015: 193)。

ナダスディや井上の議論は、野生生物の共同管理において生じるコンフリクトをあつかい、先住民と国家(およびその代理人としての官僚や科学者)の接触領域において、科学とそれにもとづく資源管理実践がもつ植民地主義的な影響を明らかにしている。本稿では、先行研究が指摘した現状を踏まえた上で、力関係の不均等をてこにしようとする先住民と科学者の戦略的な連携関係や、そのような連携関係が成り立たない場合に潜在的なパートナーである民族誌家が現地社会にどのように貢献することができるかに注目したい。

2. クスコクィム川上流域の生活とサケ利用

2-1. 調査地の概況

本稿の舞台となるクスコクィム川は、アラスカ州内の内陸部から南西部沿岸にむかって流れ、ベーリング海に注ぎこむ全長約1,130キロメートル、流域面積約124,319平方キロメートルの河川である。河口から中流域にかけては、ユピック・エスキモー、上流域にはディチナニク人(クスコクィム川上流域人)、デギタン人、内陸デナイナ人などの北方アサバスカンに属する諸集団が居住してきた。

本稿でおもにあつかうニコライ村は、現在実質的に無人状態となったテライダ村とともにクスコクィム川の最上流域にあり、両村はクスコクィム川上流域アサバスカ語を話すディチナニク人の本拠地である。ディチナニク人は、1960年代後半まで(アメリカ人研究者から)独自の言語集団として認められておらず、そのこともあって、「マグラス・インガリク」(*McGrath Ingalik*)、「コルチャン」(*Kolchan*)、「クスコクィム川上流域アサバスカン」(*Upper Kuskokwim Athabascans*)、「ディチナニク・フターナ」(*Dichinane' hwt'ana*)など様々な呼称がある。「インガリク」、「コルチャン」は近隣集団が用いた蔑称にもとづいた命名であり、不適切である。本稿では、現地語で「木々の川(クスコクィム川上流域の北支流)にすむ人々」を意味する「ディチナニク・フターナ」から、この集団を「ディチナニク人」と呼ぶこととする。

ニコライ村の人口は94、世帯数は37であり(合衆国国勢調査局、2010年)、現在ではデ

イチナニク人のほかにも、ユピック・エスキモーやヨーロッパ系アメリカ人も少数、村に居住している。当該地域は、シロトウヒ、クロトウヒ、バルサムポプラ、パピリフェラカンバなどの植生を有する亜極北気候帯に属し、6月～8月の夏季には摂氏30度ほどまで気温が上がるが、冬季には摂氏マイナス50度以下になることもある。本稿で用いられるデータは、2012年7月から2015年8月にかけて、ニコライ村をはじめとするクスコクィム川上流域およびアンカレジ、フェアバンクスなどのアラスカ州都市部でおこなわれた14か月の民族誌調査によって得られたものである

ディチナニク人は、1960年代ごろまで解氷期を漁撈や狩猟用のキャンプで過ごし、結氷期にはニコライ村に戻るといった半遊動生活を送っていたと考えられているが、現在では村で過ごす時間が増え、定住の度合いを強めている。現在のニコライ村における季節ごとの生業を紹介しておこう。春は水鳥猟の季節であり、散弾銃を用いて、マガモ、コガモ、ホオジロガモ、オナガガモ、アメリカヒドリ、マガン、カナダガン、ナキハクチョウ、カナダヅルなどを狩猟対象とする。小川や湖での待ち伏せ猟やボートでの移動中に見かけた鳥を撃つ場合もある。川の氷が融けた晩春からは、網漁が始まる。マスノスケ(6～7月)、シロサケ(7～8月)、ギンザケ(8～9月)などのサケ類のほか、ホワイトフィッシュ、シーフィッシュ、キタカワカマスなどが重要視されている。また、夏はベリー摘みの季節であり、サーモンベリー(6月)、ブルーベリー(7～8月)、クランベリー(9月)を採集する。とくにブルーベリーが重要であり、ベリー摘みの際に遭遇したクロクマの狩猟がおこなわれる場合もある。9月は現在の狩猟規則におけるヘラジカの猟期であり、ほとんどの村人がクスコクィム川流域にある狩猟キャンプと村を往復して過ごす。ヘラジカの予備猟期は2月にもあり、秋にヘラジカを獲らなかつたものはこの時期に狩猟することが可能であるし、実際には9月と2月の猟期以外にも必要に応じてヘラジカの狩猟はおこなわれている。秋の狩猟では、ヘラジカ以外にも、水鳥、ビーバー、クロクマ、ヤマアラシ、ハリモミライチョウなどを見つけ次第、狩猟がおこなわれる。晩秋には、サケの遡上地でハイイログマやクロクマを狩る。冬には、川が凍結し、人の体重を支えることができる厚さになったころから、キタカワヒメマスなどを対象とした氷下漁が始まる。11月から3月にかけては、ビーバー、オオカミ、クズリ、カナダオオヤマネコ、カンジキウサギなどを対象とした罾猟の季節である。

上記の生業活動をおこなう上で、スノーモービル、船外機付きボート、ライフル、化学繊維製の魚網、金属製罾が利用されるため、これらの品々に加えて、燃料や弾薬を買う現金が必要となる。村人は、公的機関(村評議会、学校など)における賃金労働、夏期の森林火災消防士、および生活保護の給付、アラスカ恒久基金やアラスカ先住民地域会社による配当金によって現金収入を得ている。

2-2. クスコクィム川上流域におけるサケ利用

前節で簡単に触れたように、クスコクィム川上流域では、マスノスケ、シロサケ、ギンザケの3種が初夏から晩秋にかけて遡上する。現地語であるクスコクィム川上流域アサバスカ語では、「サケ」の範疇はなく、3種はそれぞれ、独自の名前で呼ばれている(マスノスケ：*gas*、シロサケ：*srughat'aye*、*nolaya*(遡上前期のもの)、ギンザケ：*nosdlaghe*)。

ディチナニク人のサケ漁撈は、氷河由来のシルトをふくむために黄褐色に濁った本流でおこなわれるか、水が透明な支流でおこなわれるかによって二分することができる。水が濁っている本流の場合、魚網と捕魚車が有効な手段となる。魚網は魚が多く集まっている川の淀みや合流地点にしかけ、1日1~2回確認する。伝統的には植物性の網が利用されたと考えられているが、今では化学繊維の網を用いる。20世紀初頭のゴールドラッシュの時期に捕魚車がもちこまれた。これは、川の流れを利用してカゴがまわり、そのなかに入った魚を確保する装置である。水が透明な支流の場合、伝統的には築を作って、魚の動きを封じ込めて捕まえる方法のほかには、銚を使って魚を突き刺す方法も知られていた。1960年代後半以降には、漁業規制の一環で川を全面的にせき止めることが禁止されたことによって、築が用いられないようになり、現在のディチナニク人は水が透明な場所では釣竿をおもに使っている。また、遡上地では、弱った個体を殺して確保することもあるし、以前には産卵後に死亡したサケを持ち帰って利用していたようだ。

もちかえったサケは、ジャガイモや米とともにスープにして食べることがもっとも一般的であるが、場合により、炒めて食べることもある。食味の点でマスノスケが一番重要であり、シロサケ、ギンザケは人の食料が足りている場合にはイヌに供する食料として考えられている。とくにシロサケはアラスカでは「イヌのサケ」(dog salmon)と呼ばれている。備蓄用のサケは、さばいたあと、燻製小屋にかけられて、燻製・乾燥される(写真1)。現在では、ゴミ袋用の大きなビニール袋に包んで冷凍庫にそのまま保存する者も多い。



写真1 マスノスケの燻製作業
(2015年7月筆者撮影)

これまで、ディチナニク人をふくむ太平洋流域の北方アサバスカン諸社会は、サケに依存した社会と考えられ、対照的に、サケが遡上しない北極海流域の北方アサバスカン諸社会ではより多様な種の利用が見られ、より遊動的な社会構造をしていると言われてきた(Osgood 1936: 20-21)。これに対して、エドワード・ホスリー(Hosley 1977)は、非—先住民との接触以前には、太平洋流域の集団においても大型獣の狩猟のほうがより重要であり、漁撈はあくまでも補佐的役割を担っていただけであると論じ、民族誌において記録されているようなサケに依存した社会が生まれたのは非—先住民との接触にともなって、人々が低地での生活に適応するようになったからであると主張した。

先史時代の内陸アラスカにおいてどの程度、サケが利用されたかは、現在でも考古学者の議論的である。例えば、クスコクィム川上流域のマグラス村付近で、最近、1,000年ほど前の遺体3体が発見された。骨膠原の同位体分析によれば、当時の食事には海洋性タンパク質が多く含まれていたことがわかり、サケが頻繁に利用されたことが推測されている(Halfman et al. 2014)。また、内陸アラスカの他地域で言えば、カリン・ホフマンら(Halfman et al. 2015)は、シロサケの遺骸が11,500年前のアップワード・サン川遺跡

(タナナ川流域)で発見されたことを報告し、パレオ・インディアン集団は大型獣の狩猟に特化していたという考古学上の通説を見直す必要性を主張している。

3. 築調査における協働的な知識生産

3-1. 築調査の経緯と概要

クスコクィム川上流域においては、いくつかのマスノスケの遡上地が知られているが、ニコライ村の人々が漁撈キャンプを営むサーモン川のピトカ支流では十分な調査がおこなわれてこなかった。これまでには、1975年以來、毎年、プロペラ機を利用した上空からの調査がなされてきたが、川底近くを泳ぐ個体を観察することが難しかったり、性別、体長などの重要なデータを収集できなかつたりするなどの短所が指摘されてきた。また、クスコクィム川の下流域で遡上中のサケを捕獲して、その特徴を記録したあと、発信機もしくは標識をとりつけて放流し、流域の数か所にとりつけられた太陽充電式自動電波受信機や漁師の報告によって、遡上経路、速度などを記録する調査もある。しかし、これも遡上数の正確な測定には結びつかない。

そこでアラスカ州魚類・猟鳥獣局では、2015年初夏からクスコクィム川上流域の合同村落会社であるMTNT社と協働して、ピトカ支流に開閉式の築を設けて、この支流を通るサケの遡上数全数調査とその特徴について標本調査をおこなうことを決定した(Liller 2015: 8-9)。築を用いた調査は、遡上数や遡上個体の特徴を正確に把握することができる点で非常に有効ではあるが、実施に費用と人手が必要となる。というのも、遡上数を正確に計測するためには遡上期間中には築を毎日定期的に開閉して、調査者が目視によって遡上個体を確認することが必要となるからだ。また、遡上地は大抵の場合、へき地であり、人員・物資の輸送が困難である。そのため、この支流において築調査が実施されるのは、1981~82年の調査以来である。このような事情があるからこそ、現地社会の理解とサポートが調査の遂行において必須であるし、現金収入を得る機会が限られているニコライ村の人々にとっても、調査員としての雇用機会は重宝された。2015年の遡上期にはニコライ村の若者2名が臨時雇用の調査員として2か月半ほど雇用された。調査員はピトカ支流の築設置箇所を寝泊まりしながら、毎日、水温、天候などのデータを記録し、1日数回、築を開放して、上流にむかうサケを種ごと、性別ごとに計測した。また、標本調査としては、1週間に15匹を選んで捕獲し、体長、性別、特徴を記録したあと、鱗のサンプルを3枚取得した。

2015年と2016年に関しては、マスノスケ調査イニシアティブが研究費を拠出することが決定している。以降の3年間に関しては現在、合衆国魚類・野生生物サービス・生業管理局(U.S. Fish and Wildlife Service, Office of Subsistence Management)から研究費を獲得することができないか交渉中であるという(魚類・猟鳥獣部によるニコライ村での現地説明会、2015年4月15日)。

3-2. 科学の実践における数量化

築調査の事例は、これまで多くの科学人類学者が指摘してきたように、科学の実践における数量化と可視化の重要性を改めて浮かび上がらせている(Latour and Woolgar 1979;

ラトゥール 1999 [1987]; Nadasdy 2003; 森下 2014; cf. Asquith 1996: 243)。つまり、観察者によって異なる主観的印象をできるかぎり排するために観察データ (cf. 遡上数、体長) を数量化し、そのような数量化されたデータを図にまとめることで数字の羅列からは読み取ることができない傾向を目に見える形で提示することによって、観察結果の分析が間主観的に納得できるものであることを保証することが科学的事実の「構築」に欠かせない (cf. 池田 2012: 481-482)。京都大学の測地学研究室における知識生産を研究した森下翔 (2014: 463-464) の表現を借りれば、築調査は、築の設置と築近辺に寝泊まりする調査員の配置という介入を通して、上空からの調査では水面と水中の上部に限られていた「可視的」な領域を、「観測網」の「可設的」領域の限界である川底まで拡大することによって、調査対象となった支流における遡上数を強固な形で「事実化」するのに成功したと言える。

魚類・猟鳥獣局は、2015年4月15日にニコライ村で事前地域説明会を開催した。その際、派遣された担当の魚類学者たちは、当日朝にニコライ村評議会を訪問している。このような事前地域説明会や評議会の訪問がおこなわれるのは、先行研究が指摘するように、——調査をおこなう科学者ごとに先住民社会やTEKに関する理解や評価は異なるのは当然としても——先住民の意見に耳を傾けることが生態学的調査においても必要とされていることを示している。評議会では、挨拶も早々に、魚類学者と村の第一チーフやトライブ事務管理者 (tribal administrator)、その他の評議会勤務者との間でサケ調査やサケの動向についての意見交換が始まった。そのなかである魚類学者は、「電気を使うものには必ず盲点がある」と述べる。上述したように、魚類・猟鳥獣局では自動電波受信機を使った調査もおこなっているが、究極的には人の目に勝るものはないという意味だ。遡上数の調査をおこなうと言っても、広大なクスコクィム川流域のすべてを完全にカバーすることは到底不可能であるため、結局は利用可能なデータをつきあわせて、遡上再現モデルを介して計算するしかない (cf. Bue et al. 2012)。様々な変数を完全にコントロールすることはできないため、調査者の努力によってできるかぎり厳密に測定できる部分は厳密にしなければならないという考えである。

ピトカ支流における築調査は、クスコクィム川流域における他の築設置箇所 (8箇所) より2週間弱から3週間ほど早く、6月1日から始まったが、開始日がこの日になったのは、古老たちが知るかぎり、付近の漁撈キャンプにおけるマスノスケのもっとも早い年の初見日が6月5日であったからだ。6月上旬には最初の群れがやってくる場合があることは現地ではよく知られている。また、興味深いことにクスコクィム川上流域の支流には、より川下にあるはずの中流域の支流よりも早くマスノスケが到着する場合があったり、川下でマスノスケが獲れないときにも上流域では獲れる場合があったりすることも村人は認識していた。この点に関しては次節で詳しく検討する。

2015年には原油価格の下落により、州政府の大規模な予算カットが始まったこともあって、築調査のような高額の研究費が必要な調査をおこなう機会は限られることになるだろう。そのことを考えると、現地の人々がもつ知識を積極的に利用することによって、築設置の前にマスノスケが到着してしまい、正確な数が計測できなくなるという致命的な失敗を未然に防ぐことは非常に有益である。築調査に関する内容が地元のラジオで放送された際に、調査開始日の決定には「現地情報」(local inputs) を参考にしたことが述べられている

た (KSKO による放送)。州政府内の各局で予算カットが進み、ニコライ村の近隣にあるマグラス村でも森林火災消防関連の施設が大幅な削減をこうむったという事情もあり、予算の無駄遣いという批判をかわすためにこの点を特別に述べる必要があったとも推測できる。

魚類・猟鳥獣局が正確な遡上数を把握することに執心するのには、サケをめぐる川上と川下の潜在的な対立関係が関連しているとも見られる⁴。ディチナニク人をはじめとするクスコクィム川上流域の人々は、川下の村々および海洋における過度の捕獲によって、上流域に十分な数のサケがあがってこなくなったと考えている。この潜在的な対立関係は、おそらく、かなり昔にさかのぼるものであろう。ニコライ村の友人は、大昔に川下に住むユピック・エスキモーの戦士たちがサーモン川にすむ裕福な呪術師 (メディシンマン) の野営地を襲撃したという口碑があると私に語った (Oral History 2014-23-1)。その呪術師は 4 人の妻をそれぞれ東西南北に配置して、野営地を守らせたが、そもそも、襲撃の理由はサーモン川が非常に良い漁場であるからであった。

ここ数年、魚類・猟鳥獣局では、流域全体での生存漁業に厳しい規制をかけてきた。それは多くの先住民、とくに人口規模が相対的に大きな川下の村々にとって不満が残る決断であった。実際、2015 年にもマスノスケを対象とした生存漁業はかなり制限されたものとなり、ベテルというクスコクィム川下流域のハブとなる町では魚類・猟鳥獣局の事務所に抗議が殺到したという (Paula Schiefer 私信)。この決断が正しいものであったかは、生存漁業を差し止めてから遡上数が回復するかどうかで見極めるしかない (他の変数が変わらなかったと仮定した場合) し、先ほど触れた川下一川上間の潜在的な対立関係を考慮すると、厳密な遡上数のデータはますます重要となる。1988 年、流域の諸関係者による共同管理を推進するため「クスコクィム川サケ管理作業部会」 (Kuskokwim River Salmon Management Working Group、以下、サケ作業部会と表記する) が設立されており、近年のマスノスケ減少問題においても (複数の集団からなる) 現地住民と行政の間の情報共有・意見調整をおこなう場として機能している。サケ作業部会での会議には、魚類・猟鳥獣局がおこなった調査の結果が統計・グラフの形で現地関係者に還元されてきた (Alaska Department of Fish and Game ホームページ)。

3-3. 上流にサケが先に来る謎

ところで、「クスコクィム川上流域の支流には、より川下にあるはずの中流域の支流よりも早くマスノスケが到着する場合がある」と書いたが、これは一体どういうことだろうか。ニコライ村の古老が語る「ワタリガラスとカモメの人々」という神話は、この現象を以下のように説明している。

あるとき、人々は魚 (ここでは文脈から考えてマスノスケを指す) が獲れなくて困っていたのでワタリガラスに助けを求めた。彼らは (飼っていた) イヌをつぶして、「ネマー

⁴ サケは、河口に近い漁業者はより高品質なものをより多く手に入れることができる一方で、上流に行くにしたがって、品質も量も低下するという特性を有する資源である。そのため、サケの資源管理において、川下と川上の利害対立は頻繁に見られる (e.g. 菅 2006)

ジ」⁵を作ってワタリガラスにふるまったので彼は川下へと進んでいった。(カモメ人間たちが住む)川下の村では、築が仕掛けてあって、魚がたくさん獲れているので上流域まで魚がやって来なかった。ワタリガラスは、川下の村の人々に嘘をついて、上流にもっと良い漁場があると言って、築を壊すように仕向けた。そのため、上流の人々は魚を獲ることができた。今でも、川下の村で魚が獲れない時期なのに、川上の村で獲れることがあるのは、このおかげである。(ニック・アレクシア・シニア、未録音の聞き取り、2014年5月17日)

それに対して、魚類・猟鳥獣局に勤める魚類学者は、事前地域説明会での発表において、2014年の標識調査の結果をまとめたグラフからこの謎を明かそうとした(未出版のグラフのため、掲載しない)。そのグラフは、2014年6月5日から7月17日にかけて、クスコクイム川下流域を通過する際に捕獲され、標識をつけられたマスノスケの個体数をあらわしたものであり、そのうち、最上流域の支流で発見された個体の数が黒、それより川下にあたる地域の支流で確認された個体の数が網掛けで示されている。そのグラフによれば、6月7日～9日、11日～17日にかけて最上流域にむかう個体数(黒)が全体の過半数に達しているが、それ以降、最上流域にむかう個体数は減少していく。魚類学者は、この結果を「上流域の支流にむかうマスノスケは、川下の支流にむかう個体に先んじて遡上期の前半に遡上をおこなう傾向がある」と解釈した。

古老が語る神話から魚類学者の解釈へと至る過程は、ナダスディが批判的に論じた「区画化」と「蒸留」の事例として解釈することもできる。「ワタリガラスとカモメの人々」と呼ばれる神話は、トリックスターの主人公であるワタリガラスの機略によって、カモメ人間が独占していたサケ資源が上流の人々にもたらされるという筋書きであり、この神話が伝えている内容を恣意的に3つの角度に分けて(「区画化」して)考えてみると、以下のようになる。

(1)「川下の村で魚が獲れないのに、川上の村で獲れることがある」という生態学的事実への言及(「自然」に関する知識)、

(2)「川下の人間(おもにユピック・エスキモー)は川上の人間(おもに北方アサバスカン)の生活を妨害している」、「呪術師に頼みごとをするときには儀礼食を作って

⁵「ネマージ」とは、ゆでたホワイトフィッシュ、シーフィッシュの身をすりつぶしたあと、食用油と砂糖を入れて混ぜ、上にブルーベリーなどの漿果類をのせたものを指す。儀礼食であり、ポトラッチなどの村落内での共食においてふるまわれる。神話においては、呪術師であるワタリガラスに頼みごとをする際に人々が「ネマージ」をふるまったというくだりが散見されるので、この儀礼食は呪術師への支払いとしても機能していたと考えられる。「インディアン・アイスクリーム」とも呼ばれる。以前は、サケの身、クマ、ヘラジカの脂肪も使われていたという。この神話においては、イヌの脂肪を用いて、「ネマージ」を作ったとされるが、ニコライ村をはじめとする北方アサバスカンの人々は、基本的にイヌを食用とみなさない。トリックスターであるワタリガラスの特異性を描くために、人間の食物とはみなされないイヌの肉を好むという設定を与えたのではないかと考えられる。また、樺太アイヌの説話にはイヌの肉をおとりとしてガラスをおびきよせ、射殺する話がある(知里 1973: 442)。

もてなすことが礼儀正しいふるまいである」という、動物人間の描写に託された、人々の間の関係にまつわる批評（「社会」に関する知識）、

(3)「大昔には、すべての動物は人間であり、現在のインディアンのような暮らしをしていた」、「呪術師は様々な力を用いて、人々に必要な食べ物をもたらすことができる」といういわゆる宇宙論的前提（「超自然」に関する知識）。

「蒸留」の過程を経ると、(1)～(3)の要素が混然一体となっている神話（≡大村の定義による TEK）において、(2)、(3)が捨象されてしまい、(1)のみが残される。次に(1)で言及された現地人の観察は、標識調査の結果を踏まえたグラフのような媒介を経て、「上流域の支流にむかうマスノスケは、川下の支流にむかう個体に先んじて遡上期の前半に遡上をおこなう傾向がある」（≡上流の支流域で漁撈をおこなうディチナニク人は期間中の前半に遡上するマスノスケを捕まえ、中・下流の支流域で漁撈をおこなう他の集団は期間中の後半に遡上するものを捕まえている）という魚類学者の解釈を生み出す。このようなクスコクィム川流域のサケに関する科学的な知識生産の過程の先に、「ピトカ支流の周辺におけるマスノスケの初見日は6月5日である」という「現地情報」が接ぎ木され、築調査が6月1日からおこなわれるという判断につながる。

3-3. ディチナニク人の「生存の技法」

第4章で論じるように、先行研究が指摘する科学知と TEK の不均等な力配分は、クスコクィム川流域のサケ資源管理でも確認できる。だが、私は科学者と先住民社会の連携や先住民側のしたたかなあり方にも同様に注目するべきであると考え⁶。

最上流域の視点から考えれば、近年のサケ管理をめぐる状況は、彼らが科学者との協働をおこなうことによって、分節化された TEK が「現地情報」として「科学知」に組み込まれることで強固に「事実化」され、サケ作業部会の会合などを通じて、流域全体で受け入れられる知識として（再）定着してきた過程であるとまとめることができる。この状況は、科学知と在来知が統合されたものとしての「地域環境知」（integrated local environmental knowledge）（佐藤 2014）が形成されつつあり、協働体制への不満は少なからずあるが、ある先住民の集団にとって必ずしも否定的な結果を生み出すものではないことを示している。

サケ作業部会における最上流域の代表の一人はニコライ村在住の男性 D 氏であるが、彼は近年のクスコクィム川流域全体を対象とした厳しい生存漁業規制が敷かれるようになったのは、上流域の意見が取り入れられたからであると考えている。2015年8月のある朝、D 氏と私は隣町のラジオ局による築調査の速報を聞いていた。サーモン川で稼働する築の調査員 2 名が数えた暫定遡上数が発表されると、彼は勢いよく立ち上がり、大きなガッツポーズを作った。サケの遡上数に回復の兆しが見られた（と彼は解釈した）からだ。

⁶ 井上（2015: 195）は、ユーコン川流域先住民政府協議会（YRITWC）の理念として「先住民のパーспекティブと近代的科学的手法とを統合すること」、「対立しがちな各先住民社会の主張を調整し情報共有・合意形成を図り、一つの声を醸成すること」を挙げている。今後、ユーコン川流域の事例とクスコクィム川流域の事例とを比較し、アラスカの二大川流域の流域史に位置付けながら分析することが求められるだろう。

すぐさま、D氏は私のほうを向いて、「近年、マスノスケの生存漁業がほとんど差し止めに近い状態になってきたのは、私(D氏)と隣町に住むR氏がそのことを強く主張してきたからだ。だから、当初、私たちは川下の人たちから煙たがられていた。今度の調査結果は、漁業規制のおかげでマスノスケの遡上数が回復したということを示しているし、最近では川下の人たちも(遡上数が一時期と比べて回復してきたように実感されるので)私たちに感謝するようになってきた」と述べた。

川上の視点から考えれば、科学者が彼らのTEKを「文化」の違い(i.e. アサバスカン、ユピック・エスキモー、ヨーロッパ系アメリカ人)を超えて通用すると考えられている「科学知」の形に変換したからこそ、みずからの主張が受け入れられることにつながったのである。サケ作業部会に出席する川下の人々、魚類・猟鳥獣局の魚類学者、加工業者などは「ワタリガラスとカモメの人々」の神話を聞いたこともないであろう。むしろ、川下で漁撈をおこなうユピック・エスキモー(および近年では非一先住民の商業漁業者)への鬱憤がこもったこの神話は、呪術師であるワタリガラスの機略によって貪欲なカモメ人間たちに一泡吹かせるという筋書きを通して、川上に住むアサバスカン・インディアンたちのカタルシスを喚起するものだ。その意味で、これはそもそも、内部消費向けの神話的活劇であり、共同管理の趣旨にそぐわない。

実は、D氏の祖父G氏(故人)は、クスコクィム川中・下流域においても知られた有名な呪術師であった。D氏の父親P氏(故人)は狩猟の名人であり、神話や禁忌の知識にも明るかった。二人の血を引くD氏はいわゆる「超自然」的な知識を多く有しているし、幾度となく、みずからを呪術師であると見なしていると私に打ち明けた⁸。また、最近では、ニコライ村でも野生鳥獣の肉や魚を食べる機会が減ったと言われているが、D氏宅では、毎日のようにヘラジカ、マスノスケ、ホワイトフィッシュ、ビーバーなどの野生生物が食卓にのぼり、ときにはカナダヤマアラシ、ナキハクチョウ、カナダヅル、アメリカクロクマ、カナダオオヤマネコを食べることもある。「伝統的な物語」に精通し、「伝統的な食べ物」を食べることを欠かさないD氏宅はいわば、村きっての「伝統」派、保守派である。

しかし、D氏の父であるP氏は、長年、狩猟ガイドを務め、アラスカ山脈のふもとにある狩猟キャンプにて、合衆国内のみならず、ヨーロッパや日本からさえ来る様々なスポー

⁷ R氏は、隣町在住の非一先住民の高齢男性である。R氏は、1960年代前半から1970年初頭にかけてニコライ村に在住しており、D氏の父親であるP氏の罫かけパートナーであった。ニコライ村の人々と深い親交があり、みずからも生活のために狩猟と漁撈をおこなうため、付近の自然環境に詳しい。

⁸ クスコクィム川上流域では、呪術師は病気や怪我の治療をおこなったり、猟師に猟運を授けたりすることができるが、同時に人を病気にしたり、猟運を奪ったりすることもできると考えられていた(Oral History 2014-23-1; 2014-23-2)。また、呪術を使う力は血縁によって受け継がれると考えられている。現在、村人が認める呪術の実践者はいないが、呪術師の血を引くもので、みずからを呪術師であると見なす、より正確に言えば、みずからが呪術を用いる力を潜在的にもっていると考えている者はD氏以外にもいる。現在では、ある種の妖術告発(文化人類学的に厳密に言えば、「邪術」告発)のように村人がみずからの不幸を特定の呪術師による介入であると見なしたり、みずからを呪術師とみなす者が口論の際に相手に「メディシンマンの呪い」をかける(邪術の使用)と脅したりする場面がある。

ツ狩猟者⁹の案内をしてきた。また、アラスカ州アンカレジからノームまでのおよそ 1600 キロを結ぶアイディタロッド長距離犬ぞり大会の現地ボランティアも初回大会から務め、犬ぞり選手や大会関係者の間では有名であった。そのような彼の幅広い交友関係を反映して、P 氏の葬儀には、親族や他の村人のみならず、学校教師や野生生物警察官を含む多くの非一先住民も駆け付けた。P 氏は、「伝統」的な暮らしに誇りを持ち、それを現代にも継続させていこうと考えていたからこそ、非一先住民とも積極的に関わる生き方を選んだのであった。父と同じく、D 氏も魚類・猟鳥獣局の生業調査や国立公園サービスの企画にも積極的に関わり、2014 年秋から村評議会の議員を務めるようになったこともあって、村外の非一先住民と村をつなぐパイプ役を担いつつある。

ここで考えなければならないのは、P 氏の柔軟さである。昔ながらの猟場であったアラスカ山脈のふもとにある狩猟キャンプはニコライ村から遠く離れた場所にあり、現在では彼の家族以外にとって採算がとれないので利用されていない。P 氏は狩猟ガイド業をおこなうことで、顧客の払うお金を利用して、ドールシープやハイイログマ、カリブー、ヘラジカの狩猟に必要な用具を揃え、移動のために必要なプロペラ機をチャーターしてきた。北方先住民社会において、一般的にはスポーツ狩猟は殺した獲物をほとんど利用せずに投棄する非常に愚かしい行為と考えられている¹⁰が、狩猟において目的となる部位の違いを利用して、P 氏は狩猟記念品としての頭部を顧客であるスポーツ狩猟者に取らせたあと、自家消費用に獲物の肉を持ち帰ってきていた。P 氏の実践は、「白人」のやり方を頭ごなしに拒絶するのではなく、逆にその違いを戦略的に利用することで北アメリカ北部の混合経済において「伝統」的な狩猟生活を継続させることにつながっている。

他者との違いを前提としながら、そのなかで協働できる点を見つけて連帯を築くやり方は、アラスカ先住民のなかでもとくに小規模なディチナニク人社会にとって必須であった「生存の技法」なのではないだろうか。

4. ビーバーはサケ減少の原因か？

4-1. 増加するビーバー

ニコライ村では、サケ減少に関する様々な説がささやかれている。一般的には、商業漁業による底引き網漁の際にサケが混獲されているという話が言われるが、私は「アジア人による密漁」や海洋汚染、放射能汚染、気候変動、ビーバーの増加などが理由として挙げられるのも村内で聞いたことがある。数ある説のうち、なぜ、ビーバーの増加がサケ減少にむすびつくかと言うと、ビーバーが作るダムがサケやホワイトフィッシュといった魚類

⁹ ある日本人狩猟者は、P 氏がガイド業をおこなう区域で狩猟をおこない、その経緯を狩猟雑誌に投稿している（太田 2001）。ちなみにこの狩猟者と一緒に行動したガイドは D 氏であり、D 氏はこの狩猟者と時間を過ごしたこともあって、親日家である。

¹⁰ アークティック・ヴィレッジ村出身のグイッチンの友人は、私と村の滑走路で雑談をしている際に、スポーツ狩猟でやってきたある狩猟者が獲物の肉を滑走路に放置して帰っていったことがあったと述べた。獲物の肉を利用せずに腐らせてしまうことは、動物に対する敬意を欠く行為であり、そのような無礼なふるまいをする者には厳しい罰金を科すべきだと彼女は憤激していた。

の移動や遡上を妨げることがあると考えられているからだ。ビーバーが増加することでそのダムも増加し、サケやホワイトフィッシュなどの移動性が高い魚類の生存に影響を与えていると村人たちは言う。

ディチナニク人は、秋のヘラジカ猟、クマ猟の際にビーバーを副次的な狩猟対象としたり、冬には、凍結した川や湖の氷下に設置されたくくり罠によって捕獲したりしてきた。秋には、ヘラジカが獲れるまでのつなぎとして、野営生活を送る猟師たちにとっての重要な食料源であった。冬には、毛皮の質もよくなるので、毛皮は手袋や帽子を作る際に利用することもあれば、毛皮商人に売って現金を得ることもできた。冬は新鮮な食料が手に入りづらい時期でもあるため、新鮮なビーバーの肉や脂肪は歓迎された。また、ビーバーの脂肪は、以前には室内照明の光源としても利用されていたようであるし、犬ぞり用の犬が寒さをしのげるようにしてくれると言われているため、現在でもプロ犬ぞりレーサーからの需要がある(相場は1頭40ドル程度)。

しかし、近年は、ビーバーを食べたり、その毛皮を利用したりすることが以前と比べてかなり減少したと言われている。現在では、ニコライ村の若者の多くはヘラジカを好んで食べるが、ビーバーやヤマアラシ、マスカラットなどのげっ歯類を忌避する傾向がある。ビーバーの毛皮に関しても、第二次大戦以降、毛皮の価格は下げ止まっているし、そもそも、安価で防寒性の高い衣類を購入することができるようになってきたので、ごく一部の古老が厳冬期用の手袋を作る際に利用するのみである。狩猟圧が減少したことが影響したのだろうか、実際に私も村人ともに狩猟や漁撈に出かける際に頻繁にビーバーを見かけた。とくにビーバーが冬支度をおこなう秋には、村人たちは船外機付きボートに乗り、川を移動してヘラジカを探すのであるが、2時間ほどの狩猟行の間にビーバーに10回近く遭遇したこともあった。

4-2. サケ遡上地におけるビーバーダムの小規模破壊

実際にビーバーは、サケ資源管理の文脈において、有害なのだろうか。この議論を始めるにあたって、まずは私が秋のクマ猟に同行した際の描写から始めたい。ニコライ村の猟師たちは、ギンザケが遡上する9月末から10月にかけて、上流の遡上地に向かい、ギンザケをねらうクマを狩ってきた。ニコライ村から船外機付きボートで1時間ほど上流に進むと、次第に川幅は狭くなっていく。しばらくして、ハクトウワシ、ミサゴなどの魚食性の猛禽類が集団で上空を旋回しているのを見るようになる。クスコクィム川上流域の南支流から、そのまた支流に入り、船底を川底にこすりながら通過するような浅瀬もある。私が見た遡上地は、川幅が15メートルで、水深は20~50センチメートルほどの小川であった。時折、頭を食いちぎられた跡がある、干からびたギンザケの死骸が川岸に点在しており、捕食動物の存在を知らせている。川岸のぬかるみには、くっきりとクマの足跡も残っていた。私がクマ猟に同行したのは10月上旬であったが、小川を泳ぐギンザケを10匹ほど見かけた。私たち一行(40代の猟師N氏、20代後半の猟師A氏、その彼女であるB氏、私)は、川岸から近いヤナギの茂みに身を隠して、クマが現れるのを待っていたが、結局この日クマが現れることはなかった。

夕方、歩いて野営地に戻る途中、ビーバーダムが小川をせき止めている箇所を見つけた。

N氏とA氏はライフルを置いたかと思うと、ビーバーダムを壊し始めた。ビーバーダムは小枝や倒木を組み合わせてできているので、時間はかかるものの、破壊するのに特別な用具は必要ない。私はビーバーダムの端から少しずつ枝を抜き取っては、岸にむかって投げた。2人の猟師は岸から数メートル歩いた先から作業を始め、背丈ほどの長さがある棒を使って、複雑にからみあってダムを形作っている大小様々な枝をおしのけていく。小1時間ほどでダムには幅2、3



写真2 ビーバーダムに隙間を開ける
(2014年10月筆者撮影)

メートルほどの隙間ができ、そこから水が勢いよく川下に流れていく(写真2)。私たちは労働の成果に満足して、ダムのほとりで小休憩をとった。5分もたたないうちに赤い魚影が川をさかのぼっていくのが見えた。水位が変わったのに気づいたギンザケが更に上流で産卵するために遡上を再開したのだ。サケはダムの隙間から勢いよく漏れ出す水流に少し押し寄せ気味であったが、少し躊躇したあと、助走をつけて、一気に隙間へ飛び込んでいった。

私はビーバーダムを壊すことでサケの遡上を助けることができると村人から聞いていたが、実際にダムに隙間を開けてすぐさま、ギンザケが更に上流に進んでいくのを見たのは驚きであった。私たちは立ち上がり、川をのぞきこんでギンザケが1匹、また1匹と遡上していくのを見守った。中年の猟師N氏は「これで来年もサケが帰ってくる」と述べる。彼いわく、昔のクマ猟師たちも、このあたりで狩猟する際にはビーバーダムを壊すことを怠らなかったという。「魚類・猟鳥獣部がこういう仕事をするために私たちを雇ってくれたらいいのにね」とN氏は話を締めくくった。つまり、N氏はサケ保全を進めるための方策として、サケの遡上期にビーバーダムを破壊することが有益であり、魚類・猟鳥獣部が現地人によるこうした取り組みを応援するべきであると考えている。

4-3. 魚類学者の見解に対する反論

私は、ビーバーダムがサケの遡上を妨げていると村人が考えていることを魚類・猟鳥獣部の魚類学者たちに伝えたことがある。しかし、彼らの反応は芳しくなかった。「ビーバーダムはサケの生育にのみならず、生態系全体に対して良い影響を与えているという研究結果が出ているので(ダムを壊すのは良いことではない)」という答えが返ってきた。確かに近年、マイケル・ポロックら(Pollock et al. 2004)は、ワシントン州スティルガミッシュ川流域の調査をおこない、ビーバーダムの除去がサケの減少につながったと結論づけた。ポロックらによれば、ビーバーダムが川の流速を抑えることで池ができ、そこにサケの稚魚が生息するので、毛皮交易が盛んであった時代におけるビーバーの狩猟過多がサケの減少につながった。そのため、サケの増加を助けるためには、ビーバーの頭数を増やし、ダムを多く作ってもらうことが有効であるという。現在のニコライ村で流通する、ビーバーとサケの関係をめぐるTEKとそれに基づいた実践は、近年の漁業管理学で流通する科学的知識と相反しているように見える。

しかし、両者は両立しうる可能性があることを私は主張したい。というのも、ポロックに代表されるような近年の漁業管理学者が論じているのは、ビーバーダムを作ることや除去することが周囲の環境に与える長期的影響であり、あくまでもニコライ村の人々が言っているのは遡上期という一年のうちの限られた期間に関係することであるからだ。私は、上に描写した狩猟行に同行してから1週間後、同じ遡上地に再び赴いた。N氏、A氏と私によって部分的に破壊されたビーバーダムは、元通りになっていた。私たちがクマを待ち伏せていた小川ではビーバーを見かけることもあったため、そのビーバーが私たちのいない間に修復したものと考えられる。ニコライ村の人々がおこなってきたビーバーダムの破壊はあくまでも小規模なものであるため、ポロックが問題視したような行政による大掛かりなダムの完全撤去とは異なるものとして考えたほうがよいのではないだろうか。

実際、サケの遡上地におけるクマ猟とそれに連動したビーバーダムの小規模な破壊行為は、サケの遡上をめぐる様々な生き物の連鎖にくみこまれた活動として考えることができる。ギンザケの場合、晩夏から晩秋にかけてクスコクイム川上流域へと遡上してくる。それを追って、頂点捕食者(ハイイログマ、ハクトウワシ、ミサゴ)が遡上地へと移動する。ヒトは、遡上前の時期は遡上地よりも川下でサケの漁撈、ヘラジカ、クマなどの狩猟、ベリー類の採集を行っているが、遅くとも晩秋には遡上地にむかう。そこでは、ギンザケは、ビーバーダムによる遡上の阻害とハイイログマなどの捕食を受けている。ヒトは、サケの遡上地で待ち伏せすることによって、ハイイログマを殺し、捕食圧を軽減するだけでなく、同時にビーバーダムの小規模な破壊をおこなうことでギンザケの遡上を補佐する。その後、部分的に破壊されたダムは短期間で修復されることで、サケの稚魚が生息する場所などとしての生態系サービスを提供する。このように整理すると、サケの遡上地における諸活動は、生態学的にも理にかなった実践であることがわかる。

だが、ディチナニク人たちが事あるごとにビーバーダムの悪影響について魚類・猟鳥獣部の勤務者に説明してきたにもかかわらず、グイッチンに関して井上(2015: 193)が指摘したように、彼らの語りはTEKや「現地情報」として魚類・猟鳥獣部の報告書に記録されているものの、魚類学者、漁業管理学者のお墨付きを経ないかぎり、意志決定の材料としては用いられることはないだろう。前節において、私は分節化されたTEKが魚類学者による科学的知識の生産を助けることがあり、それを川上の主張が流域全体の常識として再流通していく過程として肯定的に描いた。しかし、ビーバーダムの評価をめぐるのは、魚類学者とクスコクイム川上流域の人々は連帯を築いていないし、2つの事例(i.e.サケの遡上時期をめぐる前節の議論とビーバーダムの影響をめぐる本節の議論)をあわせて考えると、科学的知識の生産者である魚類学者が「現地情報」の有用性を決定するゲートキーパーとして機能しているという見方もできるだろう。

1990年代にクスコクイム川上流域においてヘラジカ減少が問題となったときには、現地の人々はタナナ首長会議を通して魚類・猟鳥獣部に窮状を訴えた。公聴会や頭数調査を経て、ヘラジカ減少に寄与したオオカミ、クロクマ、ハイイログマを射殺したり、移動させたりする天敵管理プログラムの実施が決定された(現在も継続している)(Andersen 1995)。さらにそのプログラムの実施がもたらした結果は生態学者によって評価をうけている(Keech et al. 2011)。もし、魚類・猟鳥獣部の科学者を説得することさえできれば、「狩猟

委員会」(Board of Game) や「漁業委員会」(Board of Fisheries) から有利な決定を勝ち取ることも可能である。

先ほど、魚類・猟鳥獣部の魚類学者がビーバーによる被害を検討の俎上にもせるのをためらう理由は、最近の研究によってビーバーはサケにとって有益であるとされているからであると述べた。先行研究が指摘するように、結局のところ、TEK をとり入れることを評価する最近の北アメリカにおいても、科学者はみずからの研究計画やアジェンダに沿うような形でしかそれを取り入れることはなく、TEK にもとづいて、研究計画全体を見直すことはない。サケの数を数えるという共通目的があるかぎり、科学者と先住民は協働することができる。その際には TEK から派生した「現地情報」は科学的知識の生産を非常に有効に補助することがあり、そのように生産された知識がある社会の声をうまく代弁する結果につながる場合もある。しかし、ビーバーダムの評価をめぐるすれ違いのように、TEK は、科学の実践がむかう先を方向づけることはない。いわば、TEK は科学的知識の侍女である。

4-4. 資源管理における文化人類学の貢献とその限界

これまでの議論で数度言及したが、魚類・猟鳥獣部には人類学者が雇用されている。近年、クスコクィム川上流域で活動している魚類・猟鳥獣部の魚類学者はおもに商業漁業課 (Division of Commercial Fisheries) に勤務しているが、人類学者はおもに生業課 (Division of Subsistence) に所属している。生業課の前身は、1978 年にアラスカ州魚類・猟鳥獣部内に設けられた「生存狩猟・漁撈セクション」(Section of Subsistence Hunting and Fishing) であり、生業としておこなわれる漁撈や狩猟に関する情報収集をおこなうことで自然資源管理当局の意思決定を助ける役割を果たしてきた (Alaska Department of Fish and Game ホームページ)。このセクションができた背景には、アラスカ先住民請求処理法 (1971 年) や生業法 (1975) の制定を含む、アラスカ州における先住民行政がたどった一連の歴史が関係しているが、紙幅の関係で本稿では取り上げない。この点に関しては詳しくは久保田 (2009) による、法概念「サブシステンス」¹¹の成立をたどった論文を参照してほしい。生業課で働く人類学者は、毎年、秋ごろにその年の漁獲などを調査するために村々を訪問するのがルーティンとなっている。こうした生業調査に赴くのは、おもに修士課程、および博士課程の院生であり、私のアラスカ大学の級友や知人も多く参加している。

魚類・猟鳥獣部は、2001 年から 2002 年にかけて、クスコクィム川上流域 4 集落の TEK や生業に関する集中調査をおこない、その結果を報告書として発表している (Holen et al. 2006)。彼らの調査によれば、当時のニコライ村の人々は、ビーバーダムの数が増えすぎたのと川の水位が下がっているせいでホワイトフィッシュの移動がさまたげられていると考えていた。村人たちは湖に閉じ込められたホワイトフィッシュのためにビーバーダムを壊したこともあったのだという (Holen et al. 2006: 92-93, 116)。サケについては、同様のこ

¹¹ 久保田 (2009) は subsistence を「サブシステンス」とカタカナで表記しているが、その表記法の選択がなされた背景にはこの言葉が法概念として成立する過程で多義的に使用されてきたという経緯があり、とくに先住民と非先住民との間でこの言葉が喚起するイメージはまったく違う。しかし、本稿では、アラスカ先住民研究以外の読者にも理解しやすくすることを考え、一般的な訳語である「生業」、もしくは「生存」を当てた。

とをすることは報告されていないが、ビーバーによる被害という現地の認識は少なくとも2000年代前半には魚類・猟鳥獣部が知るところであったようだ。

クスコクィム川上流域における生存漁業で重要とされるサケやホワイトフィッシュの減少は、現地人のみならず、州政府も大きな問題とうけとめている。だからこそ、魚類・猟鳥獣部の調査者を送って、築調査などの遡上数を知るための調査や、生業実施状況、現地人の見解をめぐる文化人類学的な調査さえおこなってきた。しかし、実際のところ、TEKとして資源管理の場において利用されるのは、そのごく一部のみであり、等閑視されるのは、必ずしも、神話や呪術などのいわゆる「超自然」的知識・実践であるとは限らない。むしろ、そのときの科学界の常識にあわせて、ビーバーダムによる遡上・移動の阻害という生態学的に一理ありそうな見解でさえも、魚類学者による、より詳しい検討の対象とされることはない。

5. 民族誌家はどのように野生生物管理に関わるべきか

5-1. 「ジャーナル共同体」の壁

ここまで、クスコクィム川上流域におけるサケ共同管理の取りくみを事例として、(1)築調査において、遡上時期に関する TEK が科学的知識を生み出すのを補佐することによって、これまで潜在的に対立関係にあった利害関係者間で情報の共有がなされたこと、(2)ビーバーダムがサケの遡上を阻害しているとする現地人に対して、科学者は近年の関連研究の成果をもとにして、現地の見解が正しいか否かさえ検討することがない状況を描いてきた。

私は第3章と第4章の事例検討を通して、2つの異なる解釈を同時並行的に示したつもりである。築調査の結果を聞いて歓喜する D 氏の姿を思い浮かべれば、TEK が現地における文脈 (e.g. 「ワタリガラスとカモメの人々」) を引きはがされた形で流通することは、最上流域にすむディチナニク人の視点からみて、ある種の戦略的連携をもたらしたと評価することもできる。しかし、クマ猟の際にビーバーダムを部分的に破壊した N 氏の言うことを考えるとき、TEK が資源管理当局の都合に合う場合以外には引き合いにだされない、いわば「つまみ食い」的状況が前景化する。

憂慮すべきなのは、アラスカ州の行政当局には人類学者が勤務しており、民族誌的調査にもとづく知見を資源管理に生かすことが前提となっているような状況においても、このような「つまみ食い」が発生することだ。現代のアラスカでは、多くの先住民は公用語である英語を話し、科学的知識生産に関してもなにがしかの理解を有している。そのため、私たち民族誌家による知識生産がなくなったと仮定しても、TEK をもつ先住民が提供する「現地情報」が十分に科学的知識生産を補助することができる。より問題となるのは、そのときどきの自然科学研究者の常識に適合しないと見なされた「現地情報」が科学的知識生産のパラダイムを超える形で新しい知識生産にむすびつかないことだ。

この点は、「レジデント型研究機関」の考え方にひそむ難点を指摘した菅豊の議論ともひびきあう。佐藤哲によれば、「レジデント型研究機関」は以下のように特徴づけられる。

レジデント型研究機関とは、地域社会のなかに定住して研究を行う研究者を擁する大学、研究所などで、地域環境や生態系サービスなど、地域社会の課題に直結した領域融合的な研究を行い問題解決に貢献することを、その使命として明瞭に意識しているものをいう。(レジデント型研究機関は) …地域の課題にかかわる領域の専門家として科学的知識の土着的知識体系への取り込みを促進すると同時に、ステークホルダーの一員として地域社会の未来に対する責任を共有し、生活者として地域環境に対する誇りと愛着、地域社会が受け継いできた土着的知識体系を体現し、地域社会の成員として意思決定に関与し続ける研究者を提供する (佐藤 2009: 219)

菅 (2013: 224) は、この考え方に賛意を示しながらも、個人レベルで「レジデント型研究者」を考えた場合に、それぞれの専門分野における「ジャーナル共同体」で評価される知識生産と地域課題の解決に求められる知識生産とが必ずしも一致しない場合があると述べる。だから、「レジデント型」の研究は、「ジャーナル共同体」への貢献度によって評価を受ける通常のアカデミック研究者にとって敷居が高いものとなる。

アラスカ州の魚類・猟鳥獣局には、生態学者、漁業管理学者、統計学者、文化人類学者などの専門家(大学院生をふくむ)が在籍しており、各担当地域の利害関係者と調整をおこなないながら、資源管理に関する業務にあたっている。その点において、魚類・猟鳥獣局は、学際的で問題解決志向が強い「レジデント型研究機関」にかなりあてはまる。本稿のこれまでの議論で示そうとしてきたように、「レジデント型研究機関」としての魚類・猟鳥獣局は、アラスカ州の協働的な資源管理において重要な貢献をなしてきた。しかし、個人レベルで見ると、「ジャーナル共同体」の壁によって学際的な知識生産が阻害されているとも言える。生業課の文化人類学者は、あくまでも「現地の見解」を収集することしかできないし、商業漁業課の魚類学者が学界の常識と一見矛盾するように思えるトピックをあつかうのは容易いことではない。

5-2. 「ネイチャーライティング」としての民族誌

それでは、どうしたらよいのだろうか。また、魚類・猟鳥獣部に属さない私には何ができるのだろうか。私は野生生物管理に関わろうとする民族誌家を取りうるひとつの可能性を「ネイチャーライティング」と表現したい。一般的な定義はさておき、私がこの言葉で意味するのは、『文化』や『世界観』の表象を専門とするはずの民族誌家による『自然』や『世界』の表象である。サケ遡上地におけるクマ狩猟という民族誌的描写は、その最中におこなわれたビーバーダムの小規模破壊によってギンザケが遡上を再開する場面につながることで、諸々ある「現地の見解」の墓場——生産された知識が新しい何かを生み出さないのであれば、それはもう死んでいる——であることを超えて、アラスカのサケ資源管理における新しい「現実」の可能性を開く媒介物であることをめざすはじめの一步であった。

今、私たちが取り組むべきなのは、「文化について書く、文化に立ちただかって書く、そして文化のあいだで書く」(クリフォード 1996: 4) ことにまつわる一連の問題系だけではない。ある〈場〉における諸々の人間と諸々の人間以外の人格 (non-human persons) と

のもつれあいに身をおきながら、私たちは「世界が存在する仕方について一般的な事柄を主張できるのだろうか」(コーン 2016: 23) という問いを、みずからの経験を介して書くことに取り組みなければならない。

この問題にすでにナダスディは取り組みはじめている。ナダスディ(2012)は、TEKや在来知という形で北方狩猟民の実践や信念に注目し、敬意をはらうことが当然となったカナダにおいても、本稿や先行研究が指摘するような「つまみ食い」状況が発生することに触れた上で、その周辺化に人類学の「文化的構築物」概念が図らずも寄与してしまっていると述べる。「文化的構築物」概念には、「それらの関係が純粹に象徴的もしくは隠喩的であり、現実ではないという含みがある」(ナダスディ 2012: 295)。彼の言葉を換言すれば、この概念の基層には、「先住民は～と言うが、実際には…であると科学者が証明している。～という先住民の語りは、彼らの伝統的な考え方のなかでは正当化されているが、それは『現実』には生じない」という前提がある。ナダスディは、そのような前提をまったく疑わない者がどのようにして、先住民の権利を擁護することができるのだろうかというラディカルな問題提起をおこなっているのだ。

この点をつきつめて考えるための逸話として、ナダスディは罾猟の経験を引き合いに出す。冬の日のこと、あるカンジキウサギは、彼が仕掛けたくくり罾にかかったあと、逃げ出すことに成功する。数日して、ナダスディは、首にかかったままのくくり罾のせいで死にかけているウサギを自宅の軒先で発見する。このとき、彼は「動物がみずから猟師に身を捧げる」という先住民の言説が文字通りの「事実」なのではないかと考えたのだという(ナダスディ 2012: 338-340)。もちろん、この逸話的経験はたやすく一般化できるものではないし、この逸話の価値は、ナダスディの身体的経験にもとづく一般化不可能なものであるからこそ重要なものかもしれない。しかし、なににせよ、彼の呼びかけは、「現実」を構成する基準じたいを疑う機会を提供することに民族誌の魅力を見出そうとする点において本稿の主張と通底する。

今、私が言及している「ネイチャーライティング」は、究極的にはある特定の「ジャーナル共同体」での品質保証過程からまぬがれられない学术论文ではなく、ノンフィクション小説やルポルタージュ、もしくはドキュメンタリー映像の形をとることが十分にありうる。その意味で、民族誌が「旅行記から生まれ、十分に確立されたイメージに訴えている」(プラット 1996: 71) ことは祝福を意味する。良質な民族誌/旅行記は、著者である〈我が身〉が通り抜けて行った諸々の先行する経験・書物・イメージから生まれたものでありながら、未来の読者にむけて、〈いまここ〉ではない世界を想像＝創造させる。そして、それは「日常の言葉をパフォーマンスに破壊することによって共同体のエトスをよびさまし聞き手に倫理的に行動するように訴えかける」(タイラー 1996: 233) という意味における〈詩〉——ただし、それは誰/何にとっての共同体や倫理について語っているのだろうか——は問われなければならない——である。どのような民族誌も、著者の意図にかかわらず「実践的」であり、諸々の人間を感動させる/動員する (move/mobilize) ことで究極的には未来の「現実」を制作する。

「ネイチャーライティング」としての民族誌は、私たちが表象(再一現前化)しようとする、人間と人間以外の人物が構成し、また、それらを構成するような「飛び出し絵本」

である。そして、「飛び出し絵本」によって喚起され、動員された読者によって〈いまここ〉の世界を囲い込み、そこにちいさな隙間を開けることをめざすとき、私たちはウィリアム・プルーイト (2002 [1967]) や星野道夫 (1999) を批判的に継承すべき先達と考えることができる。私がこのふたりの著名な文筆家¹²に言及する理由のひとつは、森やツンドラの動植物を鮮やかにとらえた自然描写のみならず、アラスカ先住民の生活も随所に描いているからである。文化人類学者としてのキャリアの後にネイチャーライターに転身したりチャード・ネルソンもあわせて、「アラスカ」を描くことは、(文化人類学に引きつけた言い方をすれば) ある意味での「複数種間の民族誌」(multi-species ethnography) を書くことに他ならない。

謝辞

本稿のもととなった現地調査は、ニコライ村評議会の許可のもと、松下幸之助記念財団 2013 年度研究助成「野生生物管理における協働的知識生産の民族誌—内陸アラスカ・内水面漁撈の漁獲量減少を事例に」(助成番号: 13-G11)、および科学研究費補助金(基盤研究 A)「動物殺しの比較民族誌研究」(課題番号: 24251019、研究代表者: 奥野克巳)の補助をうけておこなわれた。本稿の草稿は、現代民俗学会第 29 回研究会「獣害問題を民俗学から考える—在来知と科学的管理の交錯」において口頭で発表されている。その際、指定討論者であった田口洋美氏、奥野克巳氏、および、フロア参加者の菅豊氏、川田牧人氏、大石高典氏から貴重なコメントをいただいた。また、本稿の執筆にあたって、2 名の匿名査読者による有益な指摘があった。関係者、関係機関に記して謝意を表したい。

参考文献

Andersen, David

1995 *The Alaska Department of Fish and Game Public Opinion Survey on Predator Control in Game Management Unit 19D East*. Juneau : Alaska Department of Fish and Game.

Asquith, Pamela J.

1996 “Japanese Science and Western Hegemonies : Primatology and the Limits Set to Questions”, In L. Nader (ed) *Naked Science : Anthropological Inquiry into Boundaries, Power, and Knowledge*, pp. 239-256, New York : Routledge.

Bue, Brian G., Kevin L. Schaberg, Zachary W. Liller and Douglas B. Molyneaux

2012 *Estimates of the Historic Run and Escapement for the Chinook Salmon Stock Returning to the Kuskokwim River, 1976-2011* (Fishery Data Series No. 12-49). Anchorage : Alaska Department of Fish and Game.

知里真志保

¹² 周知のとおり、プルーイトの本業は生態学者であり、星野道夫は写真家である。

- 1973 『知里真志保著作集 2』、平凡社。
クリフォード、ジェームズ
- 1996 「序論—部分的真実—」、クリフォード&マーカス(編)『文化を書く』春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和辻悦子訳、pp. 1-50、紀伊之國屋書店。
- Colombi, Benedict J. and James F. Brooks (eds)
- 2012 *Keystone Nations : Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*.
Santa Fe : School for Advanced Research Press.
- Cruikshank, Julie
- 1998 *The Social Life of Stories : Narratives and Knowledge in the Yukon Territory*.
Lincoln : University of Nebraska Press/ Vancouver : UBC Press.
- Halffman, Carrin M., Ben A. Potter, Holly J. McKinney, Bruce P. Finney, Antonia T. Rodrigues, Dongya Y. Yang, and Brian M. Kemp
- 2015 “Early human use of anadromous salmon in North America at 11,500 y ago,”
Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America 112(40) : 12344-12348.
- Halffman, Carrin M., Robert Sattler, and Jamie Clark
- 2014 “Bone Collagen Stable Isotope Analysis of Three Prehistoric Humans from the Upper Kuskokwim Village of McGrath, Western Interior Alaska”, A paper read at the 41st Annual Meeting of the Alaska Anthropological Association, Fairbanks, Alaska.
- Holen, Davin L., William E. Simeone, and Liz Williams
- 2006 *Wild Resources Harvests and Uses by Residents of Lake Minchumina and Nikolai, Alaska, 2001-2002 (Technical Paper 296)*, Juneau : Alaska Department of Fish and Game.
- 星野道夫
- 1999 『旅をする木』、文藝春秋。
- Hosley, Edward
- 1977 “A Reexamination of the Salmon Dependence of the Pacific Drainage Culture Athapaskans,” In Helmer, J., Van Dykes, S. and F. J. Kense (eds) *Problems in the Prehistory of the North American Subarctic : The Athapaskan Question*, pp.124-129, Calgary : Department of Archaeology, University of Alberta.
- 池田 光穂
- 2012 「エピクロスの子孫たち—実験動物と研究者の『駆け引き』について」、奥野克巳(編)『人と動物、駆け引きの民族誌』、pp. 237-274、はる書房。
- 井上敏昭
- 2015 「サケ資源の管理権限の獲得を目指すユーコン川流域先住民社会の取り組み」、岸上伸啓(編)『環北太平洋地域の先住民文化』(国立民族学博物館調査報告 No.132)、pp. 181-202、国立民族学博物館。

Keech, Mark A., Mark S. Lindberg, Rodney D. Boertje, Patrick Valkenburg, Brian D. Taras, Toby A. Boudreau, and Kimberlee B. Beckmen

2011 Effects of Predator Treatments, Individual Traits, and Environment on Moose Survival in Alaska. *The Journal of Wildlife Management* 75(6) : 1361-1380.

コーン、エドゥアルド

2016 『森は考える—人間的なるものを越えた人類学』奥野克巳・近藤宏・近藤祉秋・二文字屋脩訳、亜紀書房。

近藤祉秋

2016 「野生生物管理の民族誌にむけて—ポール・ナダスディ著『猟師と官僚』を読む—」『早稲田大学文学学術院 文化人類学年報』10巻 : 13-19。

久保田 亮

2009 「法概念『サブシステム』の成立—先住民権利保障へのドミナント文化の影響—」『東北人類学論壇』8巻 : 22-53。

Latour, Bruno and Steve Woolgar

1986 *Laboratory Life : The Construction of Scientific Facts*, Princeton : Princeton University Press.

ラトゥール、ブルーノ

1999 『科学が作られているとき—人類学的考察—』、山崎勝訳、産業図書株式会社。

Liller, Zachry

2015 “Good News for Chinook Salmon Escapement Monitoring,” *Kwnja’ Early Spring* 2005 : 8-9.

森下 翔

2014 「不可視の世界を畳み込む——固体地球物理学の実践における『観測』と『モデリング』」『文化人類学』78巻4号 : 449-469。

Nadasdy, Paul

2003 *Hunters and Bureaucrats : Power, Knowledge, and Aboriginal-State Relations in the Southwest Yukon*, Vancouver and Toronto : UBC Press.

ナダスディ、ポール

2012 「動物にひそむ贈与—人と動物の社会性と狩猟の存在論」、近藤祉秋訳、奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋（編）『人と動物の人類学』、pp.291-360、春風社。

大村 敬一

2002 「『伝統的な生態学的知識』という名の神話を越えて——交差点としての民族誌の提言——」『国立民族学博物館研究報告』27巻1号 : 25-120。

Osgood, Cornelius

1936 *The Distribution of the Northern Athapaskan Indians*, New Haven : Yale University Press.

太田 和利

2001 「猟行9日間、最後のチャンス レコード級のムースを撃つ」『狩猟界』2001年2月号 : 66-69。

プラット、メアリー・ルイーズ

- 1996 「共有された場をめぐるフィールドワーク」、クリフォード&マーカス(編)『文化を書く』春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和辻悦子訳、pp. 51-92、紀伊之國屋書店。

Pollock, Michael M., George R. Pess, Timothy J. Beechie, and David R. Montgomery

- 2004 “The Importance of Beaver Ponds to Coho Salmon Production in the Stillaguamish River Basin, Washington, USA,” *North American Journal of Fisheries Management* 24 : 749-760.

ブルーイット、ウィリアム

- 2002 『極北の動物誌』、新潮社。

佐藤 哲

- 2009 「知識から智慧へ—土着的知識と科学的知識をつなぐレジデント型研究機関」、鬼頭秀一・福永真弓(編)『環境倫理学』、pp. 211-226、東京大学出版会。

- 2014 「知識を生み出すコモンズ—地域環境知の生産・流通・活用—」、秋道智彌(編)『日本のコモンズ思想』、pp.196-212、岩波書店。

菅 豊

- 2006 『川は誰のものか—人と環境の民俗学』、吉川弘文館。

- 2013 『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会実践をつなぐために』、岩波書店。

スズキ、デヴィッド

- 2010 『いのちの中にある地球 最終講義：持続可能な未来のために』、辻信一訳、日本放送出版協会。

タイラー、スティーブン・A

- 1996 「ポストモダンの民族誌」、クリフォード&マーカス(編)『文化を書く』春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和辻悦子訳、pp. 227-259、紀伊之國屋書店。

Thornton, Thomas

- 2001 “Subsistence in Northern Communities : Lessons from Alaska,” *The Northern Review* 23(Summer) : 82-102.

参考にしたホームページ

Alaska Department of Fish and Game ホームページ

<http://www.adfg.alaska.gov/> (最終確認日 2015年10月19日)

利用した録音資料(公開)

Oral History 2014-23-1

Shirley Gover is interviewed by Shiaki Kondo in Nikolai, Alaska (November 3, 2014). In Kondo (2014-2015) “Edzeno’ Spirit : Traditional Beliefs and Russian Orthodoxy from Nikolai, Alaska” Oral History Collection at Elmer E. Rasmuson

Library, University of Alaska Fairbanks. (最終確認日 2015 年 10 月 19 日)

<http://oralhistory.library.uaf.edu/2014/2014-23-01.mp3>

Oral History 2014-23-2

Nick and Oline Petruska are interviewed by Shiaki Kondo and Shirley Gover in Nikolai, Alaska (November 8, 2014). In Kondo (2014-2015) “Edzeno’ Spirit : Traditional Beliefs and Russian Orthodoxy from Nikolai, Alaska” Oral History Collection at Elmer E. Rasmuson Library, University of Alaska Fairbanks. (最終確認日 2015 年 10 月 19 日)

<http://oralhistory.library.uaf.edu/2014/2014-23-02.mp3>

An Ethnography of Knowledge Production in the Issue of Declining Salmon Populations in Alaska : What should Researchers do?

Shiaki Kondo

People of the state of Alaska, U.S.A., have been troubled since around 2010 by the declining harvest of several salmon species (especially Chinook Salmon), which are important in commercial and subsistence fisheries. In this paper, I describe the resource management practices based on the cooperation between the State and Native Alaskans in the Upper Kuskokwim River region. In so doing, I also aim to contribute to the recent discussions on Traditional Ecological Knowledge or indigenous knowledge in northern North America through a cultural anthropological analysis.

First, integration of indigenous knowledge(s) with scientific knowledge(s) during the fish weir research resulted in the construction of communal knowledge basis on the timing of salmon migration among stakeholders who have been potentially antagonistic to each other. When there are multiple indigenous groups involved in the co-management process, knowledge integration between indigenous and scientific knowledges may be empowering to the politically and economically challenged group(s).

Second, locals have pointed out the possibility that beaver dams impede the movement of salmon, while scientists have been reluctant to consider its possibility because of recent studies on the long-term benefits of beaver activities to the riverine environment. Through my observation of bear hunting trips at a salmon spawning area, I argue that scientists need to consider the possibility that partial destruction of beaver dams may actually prove beneficial to the salmon populations.

Keywords

salmon, Alaska Natives, ethnography of scientific practices, hunting, nature writing